九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

アリストテレスの定義論における知識と存在 : 『分析論後書』B巻8-10章

国越, 道貴

https://doi.org/10.15017/1398596

出版情報：哲学論文集. 29, pp.93-112, 1993-09-24. 九州大学哲学会
バージョン：
権利関係：

アリストテレスの定義論における知識と存在

――『分析論後書』B巻8―10章――

国越道貴

『分析論後書』は科学方法論の著作とされる。その著作の主題である「論証」は、数学の公理化を範とした諸科学の体系化の試みであるとともに、特に自然学においては探求を導くものとされたのである。しかし、有力な反論が現れ、論証のもつ体系化の役割を「教授と学習」という文脈においてのみ認めるが、論証の探求との関わりを否定した。つまり、論証の基本的役割は、何らかの仕方で探求し既に獲得した知識を、教授のために形式化することとして描かれることになったのである。[1] その結果、一つには、探求という知識獲得の過程が、論証を離れた場所でなされるという見方が生じた。また、アリストテレスの著作で大きな部分を占める自然学的著作は、論証式が現れないことから、教授以前の試論的位置づけしかなされないことにもなった。[2] 本論では、『分析論後書』のうち自然学的事象が扱われる定義論の考察、特に「定義対象がある」という知の解明を通じて、論証が探求において果たす役割と、「論証を通じた知識」として自然学が成立する可能性を見定めたいと思う。

「定義対象がある」という知は、定義が探求されるとき、その当の対象が「ある」ということを把握することが必須であ

るという仕方で問題となる。『分析論後書』の定義論研究という観点からしても、この「ある」ということの知に関わる点はまだ議論されるべき問題を残していると思われる。一つには、動詞「ある」が、統語論的にいかなるかたちであるのかという問題がある。つまり、「ある」は主語に対して述語となるのか、それとも別の何らかの述語の繋辞となるのかという問題である。他方、基本的な問題として、その知或いは把握が、いかなる意味であるかが問題となる。本論では、「ある」の把握が成立する過程を追いながらいくつかの解釈を退け、それが或る普遍性の把握であることを論じる。そのことにより、論証が探求過程と知識成立とにおいて果たしている役割を示したい。

I

アリストテレスの論証知の構想は、次のような仕方でまとめられる。「或る事柄を知っている（ἐπίστασθαι）」ということは、

（i）その事柄の原因を認知している（γινώσκειν）

（ii）その事柄は必然的であると認知している

という条件のもとで捉えられる（A2：71b9-16）。[3] その上で、「我々は、論証を通じてもまた知っていると主張する（φαμὲν δὲ καὶ δι᾽ ἀποδείξεως εἰδέναι）」（A2：71b17）とされる。論証は、「知識を生む（ἐπιστημονικόν）」推論、つまり「それをもつことでそれに即し（καθ᾽ὃν τῷ ἔχειν αὐτόν）」知っているということが成立する推論として導入される（A2：71b17-19）。この「知識を生む（ποιεῖν ἐπιστήμην）」という点で、論証は、論理形式だけの推論、また問答での推論と区別されるのである（A2：71b23-25）。アリストテレスは、論証の前提を他の推論の前提と区別する仕方で論証を特定し、更に論証知の問題を展開していくことになる。「論証を通じた知」は、先の条件（i）（ii）に即していえば、

（i′）論証を通じて、その事柄の原因を認知している

（ii′）論証を通じて、その事柄は必然的であると認知している

ということとして基本的に捉えられる。これら（i′）（ii′）を支えるのは、論証式における命題での主語と述語（属性）との自体的連関であることを指摘しておきたい（A4：73b16-18, A6：74b6-7, A24：85b24-25）。またここで付言すれば、論証は知をおおいつくすわけではない。つまり、論証はすべての事柄について成立するのではなく、論証不能な原理がある（A3）。しかし、論証される事柄について、「知っているということ」は、「論証をもつこと（*τὸ ἔχειν ἀπόδειξιν*）」（A2：71b28-29, 72a25-26, A4：73a21-23, B3：90b9-10, 21-22）に他ならないのである。

さて、定義論の問題が、（i′）に関わる点は明示的である。定義（*ὁρισμός*）とは、基本的に〈何であるか〉の定式（*λόγος τοῦ τί ἐστι*, B10：93b29）である（以下〈何であるか〉という表記で「何であるか」という問いに対する答えを示す）。定義論においては、〈何であるか〉と原因とが同一とされて、（i）と照応する「論証を通じて〈何であるか〉は明らかである（*δῆλον δι' ἀποδείξεως*, B8：93b17-18）」ということが一つの結論となるのである。

（ii′）については困難な問題が含まれる。というのも、定義論での例は大部分が自然学（天体学、気象学）的な事象から採られているのに対し、論証知の基本的構想が述べられる場合、例えば『分析論後書』A巻11章までを見るとき、ほとんどが数学からの例なのである。アリストテレスが自然学的事象について必然性をどう扱ったのかということは、別に考察しなければならない問題である。しかし、ここで次の箇所に着目しておいてよいであろう。必然性の問題を焦点として考察しようとする文脈において（A8）、定義論で論じられる定義の種類が予告される（A8：75b31-32）。そして、定義論で頻繁に例とされる「月蝕」を、「しばしば起こること（*τὰ πολλάκις γινόμενα*）」として捉え、それについての論証と知識について述べるのである（A8：75b33-36）。それゆえ、定義論を読む場合、その箇所で述べられる月蝕という自然現象を普遍的な仕方でとらえる（*ἢ μὲν τοιοῦδ' εἰσίν*）という指摘が顧慮されてよいであろう（A8：75b34-35）[4]。本論では、こうした（ii）必然性の方向から示唆される普遍の問題に対し、（i）原因の方向から接近したい。というのも、知識を（i）（ii）として捉

えながら、知識が何の限定もなくただ普遍に関わるとされるのは、普遍の問題自体に（i）（ii）の二つの局面があることを示すと思われるのである（A31：87b39-40, 88a5-6, A33：88b32, B13：96b3）。

II

定義論は、B巻3章での問題設定――〈何であるか〉はいかに示されるか、〈何であるか〉を論証へどのように還元するか、定義とは何であり何についてか――に始まり（B3：90a36-37）、定義をめぐる難問の総覧を経て（B3-7）、8章からアリストテレス自身が改めて考察を始める（*πάλιν δὲ σκεπτέον*, 93a1-3）。もっとも既に、B巻1―2章では、彼の定義論で重要な役割を担う、（a）〈何であるか〉の探求の順序、（b）「原因」と中項の同一、（c）「原因」と〈何であるか〉の同一が述べられている。3章での問題設定は10章の終わりで考察されたことが確認され、一応考察を終えるのである（B10：94a14-19）。[5] このように定義論は、彼の基本的方法論に従って書かれており、『分析論後書』の中では特に周到に書かれた部分といってよい。

アリストテレス自身の考察が始まる8章では、3章で挙げられた問題のうち、〈何であるか〉を論証へといかに還元するか、つまり〈何であるか〉をいかに論証式の項に配分するか（B13：96a20）という問題が主題となる。そこでは、先ず2章での成果である（c）原因と〈何であるか〉の同一が確認される（B8：93a4）。そして、（b）原因を中項とすること、論証の結論が普遍肯定命題となることが述べられる（93a7-13）。しかし、論証の結論がそのまま〈何であるか〉を示すのではない点は難問総覧のなかで確認されていた（93a9-15, B4）。では、いかなる仕方で論証が〈何であるか〉を示すことが可能なのか（93a15-16）。予め考察の結果を見ておけば、具体的には次のように描かれている（B8：93b7-12）。[6] アリストテレスの与える項配分と、それらを連関させた命題とを並記しておく（その「雷鳴」と「音」という相違については次節で述べる）。

（項配分）		（文）
A 雷 鳴 — B 火の消去	音が火の消去に属する	……大前提
B 火の消去 — C 雲	火の消去が雲に属する	……小前提
A 雷 鳴 — C 雲	〔音が雲に属する〕	……結論

つまり、「雷鳴とは何であるか（*τί ἐστι βροντή;*）」という問いで求められる答え〈何であるか〉と、「何の故雷鳴するか（*διὰ τί βροντᾶ;*）」という問いで求められる原因は、共に「雲での火の消去」であり一致する（B8：93b7-9, cf. B2：90a15-17, B10：94a3-5）。このとき、雷鳴の〈何であるか〉は、論証の結論としてではなく、原因である「火の消去」を中項として論証式上に示されるのである。このことが、先に「論証を通じて原因を認知する（cf. A2：71b10-12）」ということに照応することとして挙げた「論証を通じて〈何であるか〉が示される（B8：93b17-18）」ということの意味なのである。ただし、ここで、「論証を通じて」という表現には十分注意しておくべきであろう。というのも、それは論証知の基本構想に関わる仕方で、定義論の問題に関わっていると考えられるからである。

「原因を認知する」のが「観察を通じて」というなら、一般的な理解が得られるかも知れない。そしてその場合、「論証を通じて」といっても、実は観察を通じて認知した原因を単に論証式の中項に組み入れるだけの問題と了解されるであろう。確かに、原因はそれが目に見えるものであるとき、観察から把握される事柄である（cf. A31：88a3-6, B2：90a28-29）。しかし、アリストテレスの論証知の眼目はそうした原因自体の認知にはないと思われる。初めにA巻2章から挙げた知の成立の条件の一つ「(i) その事柄の原因を認知する」とは、テキスト上正確には「その事柄がそれの故にあるその原因〔つまり、その事柄の原因〕を、それがその事柄の原因であると認知する（*τὴν αἰτίαν γινώσκειν δι᾽ ἣν τὸ πρᾶγμά ἐστιν, ὅτι ἐκείνου αἰτία ἐστί*, A2：71b10-12）」と述べられている。つまり、「論証を通じて」成立するのは、原因自体の認知ではなく、原因と事柄がいわば「原因—結果」という関係にあることの認知なのである。

原因と同一とされる〈何であるか〉の場合も同様である。確かに、〈何であるか〉は、原因となる中項だけが（B8：93b12, cf. 93a32-33, b6）、或いは中項と小項だけからなる「雲での火の消去」が挙げられる場合もある（B8：93b6-7, B10：94a4）。しかし、原因の場合に、事柄とその原因の連関が「論証を通じて」示されるように、〈何であるか〉の場合も、基本的に「雲での火の消去による音」（B10：94a5, cf. B2：90a16）という仕方で、事柄「雲での音（雷鳴）」と原因「火の消去」の連関として示されるのである。〈何であるか〉をこうした仕方で示す定義が「ひと続きの論証（ἀπόδειξις συνεχής, B10：94a6-7）」と呼ばれるのは、小項、大項、中項からなる論証全体を意味するのである。

「何故雲で音がするか」と問われるとき、単に中項のみの「火の消去」という答も許容されたのは、既に問いにおいて小項と大項とからなる「雲で音がする」ということが真だと前提されているからである。「何故雲で音がするか」と探求するとき「雲で音がする」ということが把握されていないとすれば、その探求自体が成立しないのである（cf. B8：93a26-27, Met. Z17：1041a23-24）。本論冒頭でふれた、定義探求に先立つ定義対象の「あるということ」の把握とは、原因探求の問いにおいて前提される、こうした事柄成立の把握のことであるといってよい。[7] そして問題は、この「雲で音がする」ということが、先の例で論証の結論として現れているが、論証の結論は普遍肯定命題であるとされていたことにある（B8：93a8-9, cf. A14：79a24-29）。「あるということ」の把握は、この要請を満たす仕方で考察されなければならないのである。

ところで、すべての事柄について、このような仕方で論証を通じて〈何であるか〉が示されるのではないことを注記しておかなければならない。それは、論証に原理があり、すべての事柄が論証できるわけではないということに照応することである。A巻で数学において論証知が構想されたときの原理としての定義は、論証を通じて示されるという問題の中に入らない。「論証なしで〈何であるか〉を認知できない」と述べるとき「原因が別にあるものについては」と限定が付けられているのはそのためである（B8：93b18-19）。アリストテレスは、（1）「『あるということ』とそれの原因が同じ」（2）「『あるということ』とそれの原因が別」に、事柄を分類する（B8：93a5-6）。[8] そして、この（1）（2）の分類に照応させて〈何であ

るか〉も分類する（B9：93b21-22）。つまり（1）は中項をもたず、A巻で問題となる原理として定義（基礎措定）されるもの、例えば数論における「単一（μόνας）」に照応する（B9：93b22-25, B10：94a9-12）。[9] しかし（2）は中項をもち、それが〈何であるか〉が論証を通じて示されるものとなるのである（B9：93b22-28）。ただし、（2）は更に（2-1）それのあることが論証可能な場合、（2-2）それのあることが論証不能な場合に区分され、（2-2）の場合は除かなければならない（B2：90a10-11）。（2-2）は次節に見るように、付帯的属性であると考える。というのも、論証が関わるのは、自体的属性なのである（A7：75a40-41, A10：76b6-7, A22：84a11-12）。

III

前節で見たような〈何であるか〉を示す論証例にいたる考察を始めるに先立ち、アリストテレスは先ずB巻1―2章を振り返っている（εἰπόντες πάλιν ἐξ ἀρχῆς, B8：93a16）。そこで確認される点は、（α1）「こと（τὸ ὅτι）」を把握して（α2）「何故か（τὸ διότι）」を探求する、そして、（γ1）「あるということ（τὸ ὅτι ἔστι）」を把握して（γ2）「本質（τὸ τί ἦν εἶναι）〔〈何であるか〉〕」[10] を探求するという順序である（B8：93a16-20）。しかし、ここでの表現は形式的過ぎて、前節で示した論証例といかに関わるのか理解できない。B巻1―2章に遡って、今述べた（α）（γ）のそれぞれの系列を具体的に考察しておきたい。（α）（γ）を、「月蝕」の例を用いてB巻1―2章を中心にテキストを追えば、次のように整理できる（〈〉は筆者の補いを示す）。[11]

（α1）　月(S)は蝕する(P)ということ ―――→ （α2）　何故月(S)は蝕する(P)か

ὅτι 〈ἡ σελήνη〉 ἐκλείπει　　διότι 〈ἡ σελήνη〉 ἐκλείπει

(B1：89b27, 28, 30, B8：93b2)　　(B1：89b30, cf. B8：93b2)

（γ）〈何であるか〉の探求

（γ1）　月蝕（T）があるということ　⟶　（γ2）　月蝕（T）は何であるか

ὅτι ἔστιν ἔκλειψις（B8：93b2-3, cf. B2：90a13）　*τί ἐστιν ἔκλειψις*（B2：90a15, cf. B8：93b3）

（ε）原因の探求

（ε1）　原因が何かあるということ　⟶　（ε2-1）　原因は何であるか

ὅτι ἔστι τι 〈αἴτιον〉（B2：90a8-9）　*τί τοῦτ'* 〈i.e. *αἴτιον*〉 *ἐστι*（B2：90a9）

（ε2-2）　何の故月蝕（T）はあるか

διὰ τί ἔστιν ἔκλειψις（B2：90a16-17）

何の故月（S）は蝕する（P）か

διὰ τί ἐκλείπει ἡ σελήνη（B2：90a17）

（α1）「こと」とは、B巻1章において「SはPだ」と定式化される。そしてこれが、2章で、「部分的にある（*ὅτι ἔστιν ἐπὶ μέρους*, B2：90a2-3）」を経て、「Sに属するPがある（である）」と定式化される（*τὸ* 〈*εἶναι*〉…*τι τῶν*…〈*ὑπαρχόντων*〉, B2：90a9-11, cf. 90a32-33）。これが（γ1）「あるということ」の導入における形である。これは原因が問われるものとして導入されており（*τὸ αἴτιον τοῦ εἶναι*, B2：90a9）、また属性Pは主語Sに対し自体的に属するか、付帯的に属するかが区別されている。ところで、前節末に区別された事柄の「あるということ」も、それに対して原因が問われるものであった（*τὸ αἴτιον τοῦ εἰ ἔστι*, B8：93a4）。そこで、前節での（2）原因が別の場合の（2-1）論証可能と（2-2）論証不能の区別

は、それぞれここでの（2′-1）自体的属性と（2′-2）付帯的属性の区別に一致すると考えられる。先に指摘したように、論証が関わるのは自体的属性なのである。

さて、属性Pの一例として「蝕（ἔκλειψις, B2：90a13）」が挙げられる。しかし、日蝕（B1：89b26）と月蝕の原因は異なる。そこで原因が問われる先の「Sに属するPがある（である）」という句は、「月が蝕である」と理解するか、「月蝕がある」と理解しなければならない。しかし、前者のように「ある」を繋辞用法で読むには「月が蝕するものである（ἐκλείπουσα ἐστί. cf. Int. 12：21b9-10, Met. Δ7：1017a27-30）」といった表現である必要がある。そこで、「月蝕がある」と述語用法で読まなければならない。つまり、右図で用例から示すように、（α1）「SはPだ」は二項を含む述定であるのに対し、（γ1）は一項の定式である。

右図で（γ1）に「Pがある」ではなく特に「Tがある」と表記したのは、「主語Sの属性P」の内、論証可能な自体的属性の場合を示すためである。つまり、「月蝕（T）」とはその定義に月が含まれる「月（S）における蝕（P）」という仕方で導入されると考えられる。[12] ここに論証における「月蝕」という項（term）の成立を見ることができる。（γ1）「月蝕（T）がある」とは、「月（S）に自体的に属する月蝕（T＝「月Sにおける蝕P」）がある」のことである。それに応じ（γ1）「Sに属するPがある」の原形（α1）「SはPする」は、特に自体的な連関（α1）「月（S）は月蝕（T）する」と理解されるのである。前節の論証例に現れた「雷鳴」についても同様に、「雷鳴（T）」とはその定義に雲を含む「雲（S）における音（P）」と言い換えられる（B8：93b9, 11-12, cf. B10：94a8-9）。（γ1）「雷鳴（T）がある」は、（α1）「雲（S）で雷鳴（T）する」と理解されるのである。

以上のように、（γ1）は、先ず統語論的に「ある」の述語用法である点から、そして「ある」の主語Tは自体的属性として、定義の対象や論証の項として単独で問題になりうるという点から、（γ1）「Tが存在すること」と表記して許されるであろう。[13] 論証において確かにこうした一項命題は用いられない。しかし、（γ1）「Tが存在すること」は（α1）「SはTする（TはSに

属する）」と二項命題に変換可能なのである。[14] そしてこの（α1）「SはTする（TはSに属する）」は自体的な連関として論証の結論たりうるのである。

ここで次の点に注意しておきたい。（γ1）「雷鳴（T）が存在する」は、厳密には（α1）「雲（S）で雷鳴（T＝Sにおける P）する」である。しかし、文「雲で音がしている」における「音」と、文「雲で雷鳴している」における「雷鳴」とは、意味する（σημαίνειν）ことは変わらないという点である。[15] そしてこれが、前節の論証例で、項が「雷鳴」と提示されながら、文における例では「音」とされた背景であろう。つまり、（γ1）「Tが存在する」は、アリストテレスにとって意味という点で（α1）「SはPする」と等しいのである。この点は次節で「名目的定義」との関わりで問題とする。

残された（α2）（γ2）について見ておこう。（α2）「何故か」は「何故SはPか」であり、（γ2）〈何であるか〉は、（γ1）「Tがある」の以上のような理解から、直ちに「Tとは何であるか」としてもよい。ただし、ここで〈何であるか〉が原因と同じとされた文脈を確認しておくべきであろう。〈何であるか〉と原因の同一は、（γ2）「月蝕とは何か」と（ε2）「何の故、月蝕はあるか」とを問いとして立てたときの答えが実質的に等しいことで確保されるといってよい（B2：90a15-18, cf. B10：94a1-7）。しかし、より重要であるのは、（γ）と（ε）との過程全体の並行性である。つまり、（α1）「SはPだ」から（α2）「何故SはPか」という探求の過程は、右図の（γ）〈何であるか〉探求の過程と、（ε）原因探求の過程という二つの並行する探求の過程として捉え直されているのである。それゆえ（γ1）「Tがあるということ」と（ε1）「原因が何かある」とは同一ということになるのである。この意味は次節において考察する。

Ⅳ

さて、前節に述べたB巻1―2章の成果の確認（B8：93a17-20）に続いて、アリストテレスは（γ）〈Tは何であるか〉の探求の過程における（γ1）「Tが存在すること」の把握を二つの仕方で区別する（B8, 93a21-29）。つまり、一方で付帯的

な（*κατὰ συμβεβηκός*）把握の場合は、正しくは「Tがあるということ」を把握しているといえず〈Tは何であるか〉の探求に向かえないこと、他方「事柄T自体の何か（*τι αὐτοῦ τοῦ πράγματος*, B8 : 93a22）」或いは「〈Tは何であるか〉の何か（*τι τοῦ τί ἐστιν*, B8 : 93a29）」を把握して、「Tが存在すること」を把握するときは、〈Tは何であるか〉を探求できることが述べられている。本論冒頭から問題とした（γ1）「Tが存在すること」の把握の意味とは、（γ2）〈Tは何であるか〉への探求に必要とされる把握である。つまり問題は、「事柄T自体の何か」を把握した「Tが存在すること」の把握とは、いかに成立するかということである。この意味を順次考えていきたい。

『『事柄自体の何か』の把握」とは、そこで挙げられる例「雷鳴を雲の或る音（*ψοφός τις νεφῶν*）〔である〕と、蝕を光の或る欠如（*στέρησίς τις φωτός*）〔である〕と、ひとを或る動物〔である〕と、たましいをそれ自身を動かすもの〔である〕と〔把握する〕（B8 : 93a22-24）」が、その例に相当するとほぼ一致して解釈されている。[16] つまり、雷鳴の〈何であるか〉は「雲での火の消去による音」であるが、ここでの例「雲の或る音」はその〈何であるか〉の一部となるという点で「事柄自体の何か（〈何であるか〉の何か）」となるのである。そして、確かにそうした解釈は正当であろう。しかし、それは結果的にそうなのであり、（γ2）〈何であるか〉の把握まで先取りしてしまっている。（γ1）「雷鳴が存在する」の把握に先立つ「雷鳴は存在するか」という問いを発しているその場面で考えてみなければ、そのもつ意味を明らかにしえないだろう。

いわゆる「名目的定義(nominal definition)」、アリストテレスの言葉でいえば、「名もしくは他の名的な句が何を意味するかの定式（*ὁ λόγος τοῦ τί σημαίνει τὸ ὄνομα ἢ λόγος ἕτερος ὀνοματώδης*, B10 : 93b30-31）」[17] の考察がここで有効だろう。というのも、「名目的定義」は、（γ1）「Tが存在すること」の把握に先立つ「Tが存在するか」という問いを立てることにおいて役立つと考えられるからである。[18]（γ1）「T（SにおけるP）が存在すること」は、前節で見たように（α1）「SはPだ」と意味（*σημαίνειν*）という点については同じである。例えば、「雷鳴」の場合、（γ1）「雷鳴が存在するか」は（α1）「雲で音がするか」と言い換えられる。「名目的定義」つまり「名が何を意味するかの定式」とは、こうした言い換えのこと

であると考えられる。この言い換えにより、先にも指摘したように論証で用いられる二項命題が準備される。ここで重要なことは、「名目的定義」による「雲での音」という言い換えは、「雷鳴」という事柄について我々が言語的に理解していることを示しているであろうという点である。[19] 先ず、〈何であるか〉（＝原因）が問われるべき（γ1）「雷鳴が存在すること」が、言語的に理解されていることによって、（α1）「雲で音がしている」と言い換えられる。そして、その換言によって、何が説明されるべきことなのか明示されるのである。ただ「雷鳴とは何であるか」「何故雷鳴するのか」と問うても、何が説明されるべきこととして問われているのか明らかではないのである（cf. Met. Z17 : 1041a23-26, a33-b4）。「Tが存在すること」を知ることにおいて「『Tという事柄自体の何か』を把握して」といわれ、雷鳴について「雲の或る音」が例に挙げられたことの一つの側面はこうしたことであろう。つまり、「事柄自体の何か（〈何であるか〉の何か）」を把握するといっても、それは（γ2）〈何であるか〉まで先取りしたわけでもなければ、予め想定しているわけでもない。我々が〈何であるか〉に向かうのは、我々により知られるところからであり、「何故あるか」「何であるか」の問い自体にそうした我々の理解が含まれている意味で、それは〈何であるか〉の部分といわざるを得ないのである。そこから出発して探求される〈何であるか〉が結果として誤りであったということはあり得るかも知れない。しかしそのときは、我々の理解していることを再吟味し、問いを立て直せばよいのだ。[20]

しかし、こうした「『名目的定義』の理解」で、「『事柄自体の何か』の把握」が尽くされるわけではない。「『事柄自体の何か』の把握」は存在把握にとって十分である。しかし、「『名目的定義』の理解」のみで「存在すること」の把握は成り立たないのである。「名目的定義」は、その例として挙げられる「三角形」によって基本的な性格が了解される（B10 : 93b31-32）。「三角形」の定義は、〈何であるか〉を示す。しかし、類の基礎措定と異なり「あるということ」は容認されておらず、証明されなければならないのである（A10 : 76a32-36, cf. B7 : 92b15-17）。そしてそのことが「名目的定義」の要点として「意味しはするが〔「あるということ」を〕証明しない（*σημαίνει μέν, δείκνυσι δ' οὔ*, B10 : 93b39-94a1）」と繰り返される。

つまり「名目的定義」はともかくも〈何であるか〉の定式である限りにおいて定義の一つに挙げられるが（B10：93b29-32）、その〈何であるか〉は「意味されること」「理解されること（ξυνίεσθαι, A1：71a13, A10：76b37）」としてなのである。アリストテレスは、こうしたA巻の数学における了解を、定義論での問題と重ねて述べる。つまり、（γ1）「Tが存在すること」から（ε2）「何の故Tがあるか」の探求過程を挙げ、「存在することを知らないのであれば、そのものをこのように〔原因を知る仕方で〕把握することは難しい（χαλεπὸν δ' οὕτως ἐστὶ λαβεῖν ἃ μὴ ἴσμεν ὅτι ἔστιν, B10：93b32-33）」と述べる。ここで意図されるのは、「名目的定義」では、付帯的な仕方を除いて（γ1）「Tが存在すること」の把握は成立しないということである（B10：93b34-35）[21]。

では「名目的定義」つまり「月蝕」についての「月の光の欠如」という言語的理解だけでなく、更に「月蝕」という現象の観察が加わればどうであろうか。しかしここに、先に指摘した存在把握の二種の仕方、「付帯的な仕方」と「『事柄自体の何か』を把握する仕方」との相違があるのである。その対比の中で、「存在すること」の把握の意味が明らかにされなければならない。考察の手掛かりは、〈何であるか〉の探求に向かいうる「『事柄自体の何か』を把握する仕方」の場合、「名目的定義」としての「月の光の欠如」と同じではなく、「〔月の〕或る光の欠如」と「或る」という限定が入っていることに求められるであろう[22]。この限定が入った経緯が明かされれば、アリストテレスのいう「存在すること」の把握とはいかなることであるのか示すことができるであろう。

月蝕は、（γ2）〈何であるか〉において「地球の遮蔽による月の光の欠如」であるから、「月の或る光の欠如」における「或る」という限定は、原因を示す「地球の遮蔽による」という限定と関わっていることは予想できる。アリストテレスは、「月蝕」をA、「月」をC、「地球の遮蔽」をBとした上で、「月が蝕しているか否か（πότερον ἐκλείπει ἢ οὔ）」を探求することは、「中項Bがあるか否か（ἆρ' ἔστιν ἢ οὔ）」を探求することだと述べている（B8：93a30-32）。つまり、「月が蝕している（≡月蝕が存在する）」と把握することは、「Bがある」という把握である。しかしここで、「Bがある」ということは、「『地

球の遮蔽』がある」ということである必要はまだない。「月が蝕している」という把握の時点で、中項（＝原因）Bはまだ特定されてなくともよいのである（cf. B8：93b4-7）。それを定めるのは、（ε2）「Bは何であるか」という問いである。つまり、（α1）「月が蝕する」（＝（γ1）「月蝕が存在する」）の把握の次に問われるべき（α2）「何故月は蝕するか」（＝（γ2）「月蝕は何であるか」）という探求においてである。アリストテレスは、ここでB巻2章の図式を使っているのである。前節で述べたように（Ⅲ節の表を参照）、（α1）「SはPだ」から（α2）「何故SはPか」の過程は、（ε1）「原因が何かある」から（ε2）「原因は何であるか」の過程と等しい。つまり、月蝕の（γ1）「存在すること」の把握とは、その（ε1）「原因が何かある」という把握として成立するのである。[23]

こうした「原因が何かある」という仕方で、原因が特定されずに把握されている場合として、次の例を考えることができる。つまり、「月」を小項、「月蝕」を大項とし、「満月のとき我々との間に何も見えるもの〔例えば、雲〕がないのに影を作りえないこと」ということを中項としてアリストテレスの描く例がそれに相当する（B8：93a37-b7）。それは（α1）「月が蝕する（*ὅτι ἐκλείπει*, 93b2）」（γ1）「月蝕が存在する（*ὅτι ἔστιν ἔκλειψις*, 93b2-3）」ということが把握されているが、（α2）「何故月が蝕するか」（γ2）「月蝕は何であるか」の把握はまだなされていない事例であり、更にここでの中項が何であるか、遮蔽か、月の回転か、〔光の〕消滅か、を探求しなければならないとされるのである（B8：93a37-b7）。この例での中項「…影を作りえないこと」は原因には当たらない。というのも、原因であるには、中項が小項と大項とに対し無中項連関をなすことを必要とする（B8：93a35-36）。そして確かに、ここでの中項を原因と考えると奇妙である。しかし、この中項「満月のとき我々との間に何も見えるものがないのに影を作りえないこと」が、小項「月」と大項「月蝕」を繋ぐとき、つまり、こうした中項を了解したなかで「月が光を欠如する」ことを見るとき、「月が蝕する」ことの（ε1）「原因が何かある（*ὅτι ἔστι τι*, B2：90a8-9）」と判断するのではないであろうか。[24] そして、その（ε2-1）「原因が何であるか」＝（ε2-2）「何の故あるか（*διὰ τί ἔστιν*）」を初めて問うのではないだろうか。こうした場合に、「何か原因がある」という仕方で「月蝕が存

在する」(＝「月が蝕する」) と把握されているのである。こうした「何か原因がある」という仕方で「月蝕が存在する」と把握していることに、「事柄自体の何か」の例「月の或る光の欠如」で問題とした「或る」という限定が関わるであろう。「或る」という限定は、特定の原因による限定ではない。しかし、何か不特定の原因を把握していると考えてよいであろう。

ところで、先に「月蝕 (T) が存在する」は「名目的定義」から意味という点で「月 (S) が光を欠如 (P) する」と等しいとした。しかし同時に、述語「光を欠如する」を文から独立させ単独で問題にすると、一般的すぎて意味の同一性も確保できないことに注意すべきである。「雷鳴が存在する」の場合の「音がする」も同様である。[25] こうした主語との関わりにおいて考えられていない、つまり自体的な属性でない仕方での「月が光を欠如する」の把握を、アリストテレスは「『事柄自体の何か』の把握」と対比して「付帯的な把握」と呼んだのであろう (B8 : 93a21, 24-27, B10 : 93b34-35)。そして、こうした「名目的定義」のみによる「月の光の欠如」という把握に対し、「或る」という限定が加わった「事柄自体の何か」の把握の場合、アリストテレスはそう呼ばなかったが「自体的な把握」が成立しているといってよいであろう。つまり、その限定が示す「原因が何かある」という把握が、その事柄の自体的な把握としての「月蝕 (T) が存在する」＝「月 (S) は月蝕 (T) する」という把握を保証していると考えられるのである。

アリストテレスは知覚が「これ」「ここ」「今」といった個別状況に拘束されるのに対し、知識また論証は「普遍 (*καθόλου*)」について問題になることを指摘する (A31 : 87b29-33, 37-39)。つまり知識や論証の成立には、個々の事態の知覚から (*ἐκ τοῦ αἰσθέσθαι*) 帰納を経て「普遍」が把握されなければならないのである (A31 : 88a2-5, 14, B2 : 90a28-30)。アリストテレスのいう「普遍」とは、厳密には (ε^2) 原因の把握まで含んだところで成立すると考えられる (A31 : 88a4-5)。しかし、その前段階としての (γ^1) 「存在すること」の把握も、或る仕方で普遍的でなければならないのではないだろうか。「存在すること」とは、その導入においてそれの原因が与えられる事態であったが (B2 : 90a9-11, B8 : 93a4)、その原因は個々の事態に対してでなく、同時にそれの (γ^2) 〈何であるか〉が問われうる一般的な事態に対して問われるのである。別の仕方で言

えば、個別的な「今、月が蝕している（A31：88a1, B2：90a30）」という知覚では、「蝕（光の欠如）」が主語「月」に単に付帯するだけの独立の現象として把握される場合もあろう。例えば「ソクラテスは白い」と類比的な偶然的結びつきとみなされよう。その場合、（ε1）「月蝕の原因がある」という把握はないのである。しかし、（ε1）「原因がある」と把握されたとき、そこでは「蝕（光の欠如）」が「月」との関わりにおいて捉えられ（γ1）「月蝕（＝月における蝕）が存在する」という把握が一つの事態の把握として成立しているといいうるであろう。〈何であるか〉或いは「何故か」が問いうる把握として問題とされた、アリストテレスの「存在把握」とはそこに成立しているのである。[26]

そして、こうした普遍的な把握としての「存在すること」の把握は、そのまま論証の結論に位置するといってよい。[27] 論証の結論とは、定義論のうちにおいても普遍であるとされ（B8：93a8-9）、また自体的な命題であった（A22：84a11-12）。「月蝕が存在する」「雷鳴が存在する」という把握は、「月が月蝕する」「雲で雷鳴する」という仕方で、自体的命題として成立する。このとき、確かにまだ原因は特定されておらず、前提となる命題を特定していない。しかし、その存在把握のもつ「原因が何かある」という把握によって、原因が特定されるべき中項の位置は既に確保しているのである。あとは、小項と大項とで無中項な連関となるような中項を探せば、それが原因なのである（B8：93a35-36）。それに対して、もし、原因の探求に先立つ「存在すること」の把握が、個別的な「今、月が蝕している」といった把握に留まるなら、論証は原因の探求に何の役目も果たさないであろう。というのも、個別の事態は原因が与えられ説明されるとしても、それは普遍的な事態の或る一事例としてのみなのである。そこで、論証を離れて観察を繰り返し原因を探求した結果から論証の前提を定めて、その個別の事態を説明するということになろうからである。原因また〈何であるか〉の探求において必要とされるのは、先ず普遍的な把握なのである。そしてまた、アリストテレスの論証知の構想に、こうした個別の事態を説明する論証は基本的にない。つまり、「月蝕は地球の遮蔽による」といったいわば自然法則と「今、月を地球が遮蔽している」といった条件が前提とされ、「今、月が蝕している」という個別の事態が説明されるという形はとられない。[28] むしろ「月蝕は地球の遮蔽により、かつ月

を地球が遮蔽するならば、月は月蝕する」といった結論を含めた論証全体（cf. B10 : 94a6-7）が、即ち自然法則なのであり、それが全体として知識の対象となるである。月蝕といった「しばしば起こること」の論証において「月蝕が普遍である限り知識は常にある（B8 : 75b34）」と語った意味は、こうしたところに見出しうるであろう。[29]

以上において、「存在すること」の把握がいかなるものであるかを、定義論の範囲で論じえたと思う。繰り返せば、それは自然現象の知覚に由来するが、普遍的な仕方で成立している把握である。その成立は「中項がある（＝原因が何かある）」という把握としてあり、無中項な連関となる中項を定めることとして〈何であるか〉（＝原因）は探求される。その探求において、論証の形式が介在している。「存在すること」の把握を、「名目的定義」の理解、或いは個別の事態の知覚において考えようとする場合には、論証とは離れたところで「存在すること」の把握が成立するとしているのであり、それは結局、論証とは離れたところで、その原因或いは〈何であるか〉を探求するという見方に陥るであろう。しかし、アリストテレスにおいて、「〈何であるか〉を認知するのは、論証なしにはありえない（B8 : 93b18）」ことであったのである。

註

（1）J. Barnes, "Aristotle's Theory of Demonstration"（1969）, reprinted with revision in J. Barnes *et al.* eds., *Articles on Aristotle : 1. Science*, London, 1975, esp. p. 77.

（2）Barnes, *op. cit.*, pp. 83-85. 教授と知識成立の点からの Barnes 批判として、M. F. Burnyeat, "Aristotle on Understanding Knowledge", in E. Berti ed., *Aristotle on Science*, Padova, 1981, pp. 115-20. 自然学的著作との比較を通じた批判として、A. Gotthelf *et al.* eds., *Philosophical Issues in Aristotle's Biology*, Cambridge, 1987, part II. 及び、C. A. Freeland, "Scientific Explanation and Empirical Data in Aristotle's Meteorology", *Oxford Studies in Ancient Philosophy* 8, 1990.

（3）以下の引照において書名のないものは『分析論後書』からのものである。

(4) この箇所は、しかし、テキスト、解釈共に問題を含んでいる。cf. J. Barnes, *Aristotle's Posteriora Analytics*, Oxford, 1975, p. 131, W. J. Verdenius, "Notes on Some Passages from Book I" in E. Berti ed., *op. cit.*, p. 347. また註（29）を参照。尚、A巻8章で直接「必然性」は問題とされないが、主題である「永遠的なこと（τὸ ἀΐδιον）」は「必然性」と密接に連関する（e. g., GC B11 : 338a1-2, PA A1 : 639b24. EN Z3 : 1139b22-24）。

(5) 「一応」というのは、B巻13章でここでの考察が確認され（B13 : 96a20-22）、定義の考察が再開されるからである。但し、13章での考察は、本論での問題に直接関わらない。

(6) 後に論じるように「月蝕」についても同様に考えることができる。cf. B. G. Dod, "Eclipses and Thunderstroms", *Classica et Mediaevalia* 37, 1986, pp. 128-29, *pace* J. Barnes, *op. cit.*, pp. 208-11, esp. p. 211. 尚、ここでの雷鳴の定義は、方法論的観点から与えられており、アリストテレス自身のものではない（Mete. II. 9 : 369b14-17, cf. B8 : 93b12-13）。

(7) J. L. Ackrill, "Aristotle's Theory of Definition" in E. Berti ed., *op. cit.*, pp. 365-66.

(8) 加藤信朗氏の『分析論後書』訳註（4）を参照。『アリストテレス全集1』岩波書店、一九七一、八一八-一九頁。

(9) 定義と基礎措立は、A巻で論証知の原理（ἀρχαί）論として解釈問題をもつ。本論では、基礎措定は広義の定義の一つであり、「あるということ（τὸ εἶναι, ὅτι ἔστι）」が容認される原理という点で、狭義の定義（例えば「三角形の定義」）とは区別されるという解釈をとる。

(10) 原因と同一化される（γ2）〈何であるか〉を指して、特に「本質（τὸ τί ἦν εἶναι）」という語が用いられることがある（B8 : 93a19, B11 : 94a21, 34-36）。

(11) B巻1章で（α1）「SはPだ」（α2）「何故SはPか」に対比されるのは（β1）「Sがある」（β2）「Sは何であるか」という実体系列の探求過程である。2章では α 系列と β 系列が合わせて、γ 系列と ε 系列に変換される。β 系列についてはその変換の意味について問題を含むが、II節末での区別の「原因が同じ」場合に当たると考えられるのでここでは扱わない（W. D. Ross, *Aristotle's Prior and Posterior Analytics*, Oxford, 1949, p. 629, cf. Met. Δ18 : 1022a33-35, *pace* Barnes, *op. cit.*, p. 208）。

(12) 「自体性」の第二規定に応じる（A4 : 73a37-b3）。太陽についても述べられる意味での蝕（P）（B1 : 89b26）は、「光の欠如」と言い換えることができる（cf. B8 : 93a23）。

(13)「ある」を繋辞用法と読む解釈として、『分析論後書』で一貫してそう読む Gomez-Lobo と、一つの可能性として挙げる Ackrill がある。A. Gomez-Lobo, "Definition in Aristotle's Posterior Analytics", in D. J. O'Meara ed., *Studies in Aristotle*, Washinton, D. C., 1981, esp. p. 38, Ackrill, *op. cit.*, pp. 360-62. しかし、Ackrill が証拠とする箇所 (A10 : 94a7-8) ではそのことが直接明示されず (cf. B8 : 93a22-24)、本論でのように、論証式に現れる命題の問題ではなく、項の言い換えの問題と解釈できる (cf. A10 : 76b35-39, APr. A35)。

(14) cf. Ch. Kahn, "Retrospect on the Verb 'To Be' and the Concept of Being" in S. Knuuttila and J. Hintikka eds., *The Logic of Being*, Dordrechet, 1986. p. 25, n. 34.

(15)「雷鳴」と同じく、「シモン＝鼻の凹み性 (*κοιλότης ῥινός*)」は、「自体性」の第二規定 (73a37-b3) に相当する仕方で自体的属性であるが (SE 13 : 173b5-8, Ph. A3 : 186b18-23, Met. Z5 : 1030b23-26)、〔「音」に相当する〕「凹み (*τὸ κοῖλον*)」が、〔「雲」に相当する〕「鼻」に付加された句・文において (*ἐν τῷ λόγῳ*)、〔「雷鳴」に相当する〕「シモン」を意味すると述べられている (SE 31 : 181b35-182a3)。尚、181b36 の Ross (O. C. T.) による付加は読まない。註 (25) も参照。

(16) Zabarella は、この例を付帯的把握とするが、その批判として次を参照。Ackrill, *op. cit.*, pp. 371-74.

(17) この句の解釈は、多くの解釈者とともに Ross に従う (*op. cit.*, p. 635, cf. B7 : 92b6-7)。

(18) (α1)「SはPだ」という定式 (*ὅτι*) において、問い (*πότερον*) と答え (*ὅτι*) とが合わせて示されている (cf. Dod, *op. cit.*, p. 124.)。(γ1) についても同様である。B巻1章の論点には、問いと答えを四つの定式に揃えることもある。cf. T. Waitz, *Aristotelis Organon Graece*, Leipzig, 1846, II. p. 380.

(19)「名目的定義」の問題を「徴候 (*σημεῖον*)」(例えば「妊娠」の徴候は「乳がでること」) の問題 (APr. B27) に関連づける議論がある。その場合、「名目的定義」の内実として「我々の常識・了解 (*ἔνδοξα*)」の線がうまく捉えられる。Bolton にも指摘があるが (*op. cit.*, p. 532, n. 37)、Freeland を参照 (*op. cit.*)。

(20) これは、Ackrill の問題提起への応答である。J. L. Ackrill, *Aristotle the Philosopher*, Oxford, 1981, p. 102.

(21) 引用文の解釈について Ackrillを参照 ("Theory of Definition", p. 375)。「名目的定義」が端的に存在把握をもつという解釈は維持できないが、しかし、存在把握をもつものもある、或いは「事柄自体の何か」と同じものもあるとする解釈者は多い。

R. Bolton, "Essentialism and Semantic Theory in Aristotle", *Philosophical Review* 85, 1976, R. Sorabji, *Necessity, Cause and Blame*, London, 1980, p. 196, Gomez-Lobo, *op. cit.*, pp. 40-41, D. Demoss and D. Devereux, "Essence, Existence, and Nominal Definition in Aristotle's Posterior Analytics II 8-10", *Phronesis* 33, 1988. 註（27）での問題の他に、「名目的定義」について特別の含意が与えられる（Bolton, p. 531, p. 533, Demoss and Devereux, pp. 145-46）。

(22) cf. Bolton, *op. cit.*, pp. 529f, Sorabji, *op. cit.*, p. 196. 以下の趣旨は Sorabjiに近い。この「或る」への着目によって、Ackrill の提示する問題（*op. cit.*, p. 383）は避けられるであろう。

(23) cf. Ackrill, *op. cit.*, pp. 377f.

(24) ここでの中項に含まれる「影を作りえない」ということは、「光の欠如」を規定するものとして導入されている（cf. de An. B8 : 419b32-33）。尚、アリストテレスは、月の上に探求者がいて、月蝕の原因を直接知覚する場合を想定することがある（A31 : 87b39-40, B2 : 90a26-27）。しかしそうした想定のない場合、原因が何かあるとし更にそれを特定することは、知覚に依るよりも、理論的考察に依るものであろう。月蝕は天体学が扱い（e. g. Cael. B11 : 291b22）、雷鳴は気象学が扱う（Mete. B9）。

(25) 註（15）で挙げた文脈において、「凹み」は、単独では（χωρίς）「がに股性（τὸ ῥοικόν）」の場合とも共通なことを意味するとされ、「シモン」との意味の同一性が否定される（SE 31 : 181b35-182a3）。

(26) Boltonは、「存在把握」を、B巻19章における「経験（ἐμπειρία）」の成立と重ねている（*op. cit.*, p. 530）。

(27) この点に関わるB巻10章での定義の種類の解釈問題について、加藤氏の訳註（（3）前掲書八二〇-二二頁）を参照。Ross は「名目的定義」と「論証の結論」を同じとする。それは特に「名目的定義」に「存在把握」を想定する論者に引き継がれた。註(21)を参照。但し、Ross は「名目的定義」の「存在把握」を否定している。本論では、「名目的定義」を「存在把握」以前として位置づけ、「論証の結論」は「事柄自体の何か」と同じであるとしている。

(28) cf. Burnyeat, *op. cit.*, p. 109. Barnesは、論証の形式は Darii ではないかという疑問を提示する（*op. cit.*, p. 211）。

(29) cf. R. Grosseteste, *Commentarius in Posteriorum Analyticorum*, P. Rossi ed., Florence, 1981, p. 144.

（本学大学院博士課程・西洋哲学史）